

50度線

橋本 春雄



50度線

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

50度線（ごじゅうどせん）とは、北緯50度と南緯50度を通る緯線。本稿では特に、北緯50度線上にある樺太を南北に分ける日露（日ソ）国境線について記述する。

現在は、サンフランシスコ講和条約で日本が南樺太を放棄したことと、それに先立って太平洋戦争（大東亜戦争）末期から終戦直後にかけて南樺太に侵攻したソビエト連邦が崩壊した後、ソビエト連邦を継承するロシア連邦が樺太（サハリン）全島を占領・実効支配していることにより、国境として扱われることは殆どない。



北緯50度線の国境を警備する警察官

目次

- 1 位置情報
- 2 国境標石
- 3 国境標石の所在地と現状
- 4 国境紛争
- 5 関連項目

位置情報

- 旧日露国境線東端（オホーツク海沿岸）: 北緯50度0分0秒東経143度59分24秒 (http://toolserver.org/~geohack/geohack.php?language=ja&pagename=50%E5%BA%A6%E7%B7%9A¶ms=50_0_0_N_143_59_24_E_{{{9}}})
- 旧日露国境線西端（間宮海峡面）: 北緯50度0分0秒東経142度9分16.25秒 (http://toolserver.org/~geohack/geohack.php?language=ja&pagename=50%E5%BA%A6%E7%B7%9A¶ms=50_0_0_N_142_9_16.25_E_{{{9}}})



樺太の50度線

国境標石

- 日露戦争後の1905年、ポーツマス条約で樺太の北緯50度以南を日本が領有することとなり、翌1906年から1908年に掛けて天文測量による日露両国の国境画定作業が行なわれ、東のオホーツク海沿岸から西の間宮海峡までの、おおよそ130kmの間に4基の天測境界標、17ヶ所に平均6kmごとに中間標石、19ヶ所に木標が建てられた。
- 標石の大きさは高さ64、正面幅30～50、側面幅18～30cm程度で将棋の駒のような形になっている。標石の一面には菊花紋章（菊の紋章）と「大日本帝国」、「境界」の文字、他面にはロシア帝国の双頭鷲紋章とキリル文字でロシア（РОССИЯ）、1906、グラニーツァ（ГРАНИЦА 国境）の文字、側面には「天第1ー～四號 明治三十九年」、反対側面もアストロ（АСТР 天測）の刻字がある。

なお標石の頂部にある「模造」の文字は、新宿区絵画館前に保存されているレプリカのみで、樺太に設置されていた標石には「模造」の文字はない。

国境標石の所在地と現状

- 「天第一號」 敷香郡散江村遠内 - 1987年にソ連国境警備隊が撤去、台座も破壊された。標石はユジノサハリンスク(旧豊原市)のサハリン州郷土博物館(旧樺太庁博物館)に保存されている。
- 「天第二號」 敷香郡敷香町幌内川左岸 - 1994年に銃弾の跡が残る標石を現地住民が確認。1997年、北海道根室市の根室市郷土資料保存センターに移転された。
- 「天第三號」 敷香郡敷香町半田沢 - 1949年に撤去されユジノサハリンスク(旧豊原市)のサハリン州郷土博物館(旧樺太庁博物館)にあり天第一號と並べて展示されている。
- 「天第四號」 名好郡西柵丹村安別 - 本物は行方不明であるが、1926年、樺太庁より明治神宮聖徳記念絵画館に模造品(レプリカ)が寄贈されて現存している。

国境紛争

国境は北緯50度線と人為的なものであったが、国境紛争も起きていた。国境に関する観念は島国の日本側よりも大陸国であるロシア(ソ連)側の方が敏感であった。

- 1938年1月3日 - 新劇女優岡田嘉子、杉本良吉と半田沢からソ連に亡命。
- 1940年3月15日 - 樺太国境守備隊とソ連兵との間に衝突事件が起こる。

関連項目

- 国境
- 樺太庁

③

